

“Not I, my lord, sith true nobility  
Warrants these words in princely courtesy”  
—*Titus Andronicus* に於ける Lavinia の苦悶の責任—

村上世津子\*

(平成15年10月31日受理)

“Not I, my lord, sith true nobility  
Warrants these words in princely courtesy”:  
Lavinia’s Responsibility for her Agony in *Titus Andronicus*

Setsuko MURAKAMI\*

Because of excessive and gratuitous violence, critics have long been reluctant to recognize *Titus Andronicus* as a play by Shakespeare. Central to the gratuitous violence is Lavinia’s rape and mutilation. Despite the traditional view, however, Lavinia is more than a tennis ball which is whirled away by fate. To be sure, external forces such as Saturninus’ wooing in spite of her betrothal to Bassianus and revengeful Tamora’s becoming a queen are important. But it is Lavinia who whets Tamora’s vengeance by castigating her extramarital affairs with Aaron. And besides, it is she who publicly disgraces and infuriates Saturninus by seemingly accepting his offer of marriage and then casting him away on Bassianus’ claim. Thus, far from just being an innocent victim, Lavinia is responsible for her agony.

key words: Lavinia, honesty, dishonour

はじめに

*Titus Andronicus*はShakespeareの時代には人気を博したが、その後は暴力に次ぐ暴力の存在や、Waith<sup>1)</sup>や Simmons<sup>2)</sup>が指摘するように劇に向かない Ovidian Style が使われていることや、Charlton<sup>3)</sup>や Clemen<sup>4)</sup>が指摘するように *Titus* の行動には必然性がないことや、より大きな社会や人間的な可能性の視点が欠如している“abortive domestic tragedy”<sup>5)</sup>であるなどの理由からほとんど普遍的に酷評されてきた。それどころかその作品は

---

\* 英文学 助教授

Shakespeare が書いたのではない、Shakespeare の手が加わっているにしても仕上げに手を貸しただけだとまで言われてきた。<sup>6)</sup> 近年は構造の研究やコンピュータ分析の結果を踏まえ、New Arden の編者<sup>7)</sup>も New Cambridge の編者<sup>9)</sup>も Oxford の編者<sup>10)</sup>も Shakespeare 単独の作品であることを認めている。また Peter Brook(1955)や Deborah Warner(1987)や Julie Taymor(1999)の作品が相次いで大成功を収めたことにより、*Titus* に対する評価が変化しつつある。たとえば Brower<sup>10)</sup>や Nevo<sup>11)</sup>や Marienstras<sup>12)</sup>は *Titus* が後期の Shakespeare 悲劇を予示していることを指摘している。そして West は *Titus* が偉大な文明の終焉を告げていると指摘している。<sup>13)</sup>さらに Palmer は *Titus* が“an exciting piece for performance, and one which should stand in little need of apology”<sup>14)</sup>であると指摘している。最早 *Titus* が“one of the stupidest and most uninspired plays ever written”<sup>15)</sup>という Eliot の意見は支持されなくなってきているが、それでも依然として“a bad play”<sup>16)</sup>だと広くみなされていることは否めない。その大きな理由は劇の主要人物が経験するいわれなき苦しみであり、その中心に位置するのが無垢の Lavinia の苦しみである。<sup>17)</sup> 勿論 Titus の苦しみはとてつもなく大きい。White<sup>18)</sup>や Nevo<sup>19)</sup>や Hamilton<sup>20)</sup>ら多くの批評家が指摘しているように、彼は Tamora の哀願を斥けて Alarbus を Titus の息子たちの霊を慰めるための犠牲に供して Goths の女王の恨みを買うという過失を犯している。Lavinia についても Hillら一部の批評家は Saturninus に引き渡される時に抗議しないことや Tamora を口汚く罵ることについて批判しているが<sup>21)</sup>多くの批評家は Lavinia が何らの原因も作っていないのにとてつもない苦しみを経験させられる innocent victim だと感じている。しかも彼女の苦しみは舞台の前景で呈示されているので観客は否応なく彼女の苦しみを直視させられる。そのためこの劇のメッセージが他者のいわれなき苦しみを高みに座って見物する悪趣味な喜びに思えることがその劇の低い評価につながっている。しかし Lavinia は本当に何らの選択権も与えられていない運命の手玉に過ぎない存在なのだろうか。本稿では *Titus Andronicus* の Lavinia の苦悶に於ける彼女の責任を考察したい。

## I

Goths との戦いを勝利に導いた Rome の名将 Titus の娘として父から祝福を受ける運命の高みにいた Lavinia が転落する契機になるのは Lavinia に対する Saturninus の結婚申し込みである。Saturninus は自分を帝位につけてくれた Titus に対する感謝の意の表明として Titus に“to advance/ Thy name and honourable family,/ Lavinia will I make my empress,/ Rome’s royal mistress, mistress of my heart,/ And in the sacred Pantheon her espouse”<sup>22)</sup>と提案し、Titus に快諾される。Andronici 族を更なる運命の高みに就けようとする Saturninus の提案が逆に一族転落の契機になるのは、Lavinia が既に Bassianus と婚約していて彼が正当な権利に基づいて Lavinia を Saturninus から取り戻すからである。Titus が Lavinia と Bassianus の婚約を承知していたか否かは議論の余地があるが、Saturninus 支持の表明として彼を帝位に就け兄弟の帝位争いに終止符を打ったばかりであることを考慮すると、Titus が Saturninus の提案を辞退し難かったのは当然であろう。そして家父長制度下では父の子供に対する権利は絶対であるから父が下した決定に対して

Lavinia が反論を加えにくいことも当然だろう。他方正当な権利を有しておりかつ帝位争いで兄に負けた Bassianus が婚約者を奪われまいと正当な権利を主張することも自然な行為に思われる。とするならば Lavinia が転落の道を歩み始めるのはまさに運命に翻弄されてのことであるように思える。

新しく皇后の座に就いた Tamora のとりなしを装った言動でいったん Saturninus の怒りは抑えられ 1 幕 1 場は Lavinia に対する Saturninus の許しの言葉で終わる：“if the emperor’s court can feast two brides,/ You are my guest, Lavinia, and your friends.”(1. 1. 493-94)しかし Lavinia は翌日には奈落の底に突き落とされる。Lavinia と Bassianus は Aaron の忠告を受け Andronici 族への復讐の手始めとして Lavinia と Bassianus を奸計にかけるべく喧嘩を売ろうと待ち構えている Tamora の網にまともにかかって Tamora をして Titus に対する復讐の矛先を Lavinia に向けさせる口実、すなはち貞淑を鼻にかけて Tamora のことを姦婦とののしった侮辱に対する仕返しという大義を与えてしまうのである。その結果 Tamora の息子たちは即座に Bassianus を殺し Bassianus と Lavinia の結婚の秘儀を嘲笑するべく夫の死体の上で妻を強姦する：“Drag hence her husband to some secret hole/ And make his dead trunk pillow to our lust.”(3. 2. 129-30)強姦後 Demetrius と Caius は事件の発覚を防ぐために Philomel の例に倣って Lavinia の舌を切り、Tereus の失敗と同じ轍を踏まないように手首も切り落とす。事件の真相を告げるために Lavinia が Ovid の *Metamorphosis* の Philomel の話を指し示すときに Titus が言うように「あんなところで狩をしなければ」そのような事件は防げたかもしれない。そしてあんなところで狩をする提案をしたのは Bassianus と Lavinia ではなくて Titus であるのは言うまでもない。とするならば 1 幕 1 場での Saturninus との婚約破棄事件に続いて暴行凌辱事件でも Lavinia は運命の手玉であり、彼女自身に苦悶の責任はないように思える。しかし果たして本当にそう言い切れるだろうか。Lavinia の暴行凌辱事件を再度検証したい。

## II

1 幕の終わりで Titus が狩の提案をした直後に 2 幕 1 場で Chiron と Demetrius は Lavinia の取り合いで大喧嘩を始める。偶然その喧嘩を耳にした Aaron は 2 人の喧嘩をいさめるふりをして森のめったに人の通らない自然が作り出した悪事の場所に Lavinia を追い込んで強姦する手法を教え、彼の計画に磨きをかけるために Tamora にも計画を伝える。そして犯罪の手始めとして Bassianus に喧嘩を売るように指示し、Aaron の張った網に Bassianus と Lavinia がかかることは既に述べた。しかし喧嘩を売ったのは本当に Tamora なのだろうか。“Bassianus comes./ Be cross with him, and I’ll go fetch thy sons/ To back thy quarrels, whatsoe’er they be.”(2. 2. 52-54)という言葉を残して Aaron が退場するのと入れ替わりに Bassianus が登場し、開口一番に次のように言う：

Who have we here? Rome’s royal empress,  
Unfurnished of her well-beseeming troop?  
Or is it Dian, habited like her,

Who hath abandoned her holy groves  
To see the general hunting in this forest? (2. 2. 55-59)

Bassianus のセリフを受けて Tamora は次のように言う：

Saucy controller of my private steps,  
Had I the power that some say Dian had,  
Thy temples should be planted presently  
With horns, as was Actaeon's, and the hounds  
Should drive upon thy new-transformed limbs,  
Unmannerly intruder as thou art. (2. 2. 60-65)

この2人のやり取りを比較すると、喧嘩を仕掛けるのは Tamora というよりも Bassianus だと言えよう。Tamora がまだ口を開かない前から Bassianus は Tamora と Aaron の情事を当てこする言葉を口にするからである。なるほど Tamora は“the hounds/ Should drive upon thy new-transformed limbs”と言う。しかしその前提として“Had I the power that some say Dian had”と言っている。しかも Dian の話を持ち出したのは Bassianus の方で Tamora は Bassianus の話を利用して答えているのだから、喧嘩を売っているというよりもむしろユーモアが感じられる。それに対して Tamora のセリフを受けて言う Lavinia のセリフも Tamora の使用した“horns”を利用したものであるが、先に引用した Bassianus のセリフ以上に激しく Tamora と Aaron の情事を当てこすっている：“Under your patience, gentle empress,/ 'Tis thought you have a goodly gift in horning” (2. 2. 66-67) しかも Lavinia/Bassianus 組の Tamora に対する当てこすりはこれで終わるところか、この後彼らの舌鋒は激しさを増し、皮肉から非難に移行する：

Bassianus: Why are you sequestered from all your train,  
Dismounted from your snow-white goodly steed,  
And wandered hither to an obscure plot,  
Accompanied but with a barbarous Moor,  
If foul desire had not conducted you?

Lavinia: And being intercepted in your sport,  
Great reason that my noble lord be rated  
For sauciness.

.....  
Bassianus: The king my brother shall have note of this.

Lavinia: Ay, for these slips have made him noted long:  
Good king, to be so mightily abused! (2. 2. 75-87)

つまり Aaron と入れ替わりに Bassianus と Lavinia が登場して以来 Chiron と Demetrius が登場するまで Tamora は先に引用した Dian と Actaeon の話に言及するセリフを言うとき以外反論する機会さえ与えられていないのである: “Why doth your highness look so pale and wan?” (2. 2. 90) という Demetrius の質問に答えるときの Tamora のセリフは嘘と誇張に満ちている。Lavinia と Bassianus は Tamora をおびき出しはしなかったし、聞くものを狂い死にさせる悪魔や蛇やヒキガエルの寄り集まりが上げる狂乱の声の話もしなかったし、Tamora のことを “they would bind me here/ Unto the body of a dismal yew/ And leave me to this miserable death” (2. 2. 105-8) とも言わなかった。しかし “they called me foul adulteress,/ Lascivious Goth, and all the bitterest terms/ That ever ear did hear to such effect” (2. 2. 109-11) したことは確かである。それどころか既に議論してきたように Tamora はそのような生易しい言葉ではとうてい表現できない激しい非難の言葉を浴びせられ、やがては皇帝の知るところになるだろうというトドメの言葉も刺されているのである。Tamora が Demetrius に説明するのに使った理由は嘘だが Bassianus と Lavinia によって「血の気を失い蒼ざめる」ほどの屈辱感を与えられたことは事実である。これらのことから Tamora ではなく Bassianus と Lavinia が喧嘩を売っていると結論付けることができよう。

より重要なことは、Tamora が Andronici 族の絶滅を考えていたことは確かだが、彼女の当初の計画に Lavinia の凌辱が入っていなかったことである。母の訴えを聞いた Demetrius と Chiron は即座に Bassianus を殺すが、夫が殺されるのを見た Lavinia は “Come, Semiramis, nay barbarous Tamora,/ For no name fits thy nature but thy own.” (2. 2. 118-19) と言う。Lavinia の挑発を聞くと Tamora は息子たちに “You shall know, my boys,/ Your mother’s hand shall right your mother’s wrongs” (2. 2. 120-21) と言う。Tamora が Lavinia 凌辱を考えるのは息子の “This minion stood upon her chastity,/ Upon her nuptial vow, her loyalty./ And with that quaint hope braves your mightiness./ And shall she carry this unto her grave?” (2. 2. 124-27) という言葉を聞いた後である。しかもそのときですら “But when ye have the honey we desire/ Let not this wasp outlive, us both to sting” (2. 2. 131-32) と言っていることからすれば、Tamora にとっての重大事はあくまで Lavinia を殺すことであって彼女の処女を奪うことは二の次であったことがわかる。Titus に長男を殺された Tamora は Andronici 族に激しい復讐心を燃やし、一族全滅をたくらんでいたのだから Bassianus と Lavinia が Tamora と Aaron の情事を激しく糾弾しなくても Lavinia は遅かれ早かれ何らかの方法で殺されたかもしれない。しかしもしあの時 Tamora と Aaron の情事をあれほど激しく非難して Tamora の息子たちに Lavinia を強姦する口実を与えていなければ、操を守る可能性は残されていたかもしれない。ちなみに Lavinia はもう一度過ちを犯している。すなはち彼女に哀れみをかけてくれるように要求する理由として “O, let me teach thee for my father’s sake,/ That gave thee life when well he might have slain thee” (2. 2. 158-59) と言うことである。Lavinia のこの言葉を受けて Tamora 自身が明言しているようにそもそも Tamora が Andronici 族に激しい復讐心を抱いている理由は長男を生贄から救って欲しいという嘆願を却下されたことにある。Tamora の

怒りの源泉である Titus の行為故に彼女に恩を着せ、哀れみを引き出そうとすることは火に油を注ぐ行為以外の何物でもない。

ところでここで Lavinia がこだわっているのは彼女の命よりも彼女の操である。Lavinia は 1 幕 1 場で Titus の息子たちの埋葬が終わった直後に登場して Titus の祝福を受けるときに“live, . . . for virtue's praise”(1. 1. 170-71)と言われる。Lavinia の貞淑は彼女の破滅を計画する Aaron も認めるところである：“What, is Lavinia become so loose”(1. 1. 564)そしてそもそも彼女が Bassianus とともに Tamora の情事を激しく非難したのも自分の貞淑に絶対の自信があったからである。しかし Lavinia の貞淑は本当にそれほど堅固なものなのだろうか。Lavinia の転落のきっかけとなった 1 幕 1 場の Saturninus の結婚申し込みの場面に戻り Lavinia の貞淑を検証しよう。

### III

自分を帝位に就けてくれた Titus への感謝の意の表明としての Saturninus の結婚申し込みが Lavinia 転落の契機になるのは Lavinia が既に Bassianus と婚約していて彼が正当な権利に基づいて Lavinia を Saturninus から取り戻すからだと述べた。しかし意に添わぬ相手との結婚を強要されたり、婚約を交わしている相手と一緒にすることを邪魔されたりするのは何も Lavinia と Bassianus の結婚に特有なものではない。Othello の中では Othello と Desdemona の結婚は Desdemona の父 Brabantio に妨害されるし、A *Midsummer Night's Dream* の中では Hermia は Lysander と相思相愛なのに父に Demetrius との結婚を強要され、父の選んだ相手との結婚を拒むなら“Either to die the death, or to abjure/ For ever the society of men”<sup>23)</sup>の選択を余儀なくされる。また *Romeo and Juliet* の中では Capulet 家の娘 Juliet は仇敵の Montague 家の息子 Romeo と恋に落ちて結婚するが、わずか 3 時間後に夫は彼女のいところを殺して追放の身となり、彼女が悲嘆に暮れているときに父から大公の親戚である青年貴族 Paris との結婚を強要される。違いは愛する人との結婚を妨害されたり、意に添わぬ人との結婚を強要されたときのそれらの人物たちと Lavinia との反応の仕方にある。父に“Where most you owe obedience?”<sup>24)</sup>と聞かれたときに Desdemona は公爵と議員一同の前で“And so much duty as my mother showed/ To you, preferring you before her father,/ So much I challenge that I may profess/ Due to the Moor my lord.”<sup>25)</sup>と明言する。Hermia も父と公爵の前で“So will I grow, so live, so die, my lord,/ ere I will yield my virgin patent up/ Unto his lordship, whose unwished yoke/ My soul consents not to give sovereignty”<sup>26)</sup>と明言する。そして Juliet は父から Paris と結婚するように強要されたときに“Proud can I never be of what I hate,/ But thankful even for hate that is meant love.”<sup>27)</sup>という答えをして父の逆鱗に触れる。それに対して Saturninus が Titus に Lavinia との結婚の申し込みをし、Titus が“It doth, my worthy lord, and in this match/ I hold me highly honoured of your grace.”(1. 1. 248-49)と答えるときに当事者である Lavinia はその場に居合わせているのに何の反論もしない。いやそれどころか Lavinia は Tamora の美しさに心を奪われた Saturninus が彼女にやさしい言葉をかけ“he comforts you/ Can make you greater than the queen of Goths”(1. 1. 272-73)と言った

後で Lavinia を気遣い“Lavinia, you are not displeased with this?”(1. 1. 274)と尋ねたときに“Not I, my lord, sith true nobility/ Warrants these words in princely courtesy”(1. 1. 275-76)と答えている。Saturninus が Lavinia を気遣うのは Lavinia を王妃にすると約束したのに Tamora を「ゴートの女王以上の身分になし得る」と言うのは Lavinia の気持を逆撫でする恐れがあることに気づいたからであろう。とするならば Lavinia の発言は新皇后としての立場からの発言と解釈するのが妥当であろう。換言するならば Lavinia のこの発言は Saturninus の結婚申し込みを Lavinia 本人が受け入れたことの表明と解釈され得る。更に重要なことは“in the sight of Rome”(1. 1. 250)に於いて Saturninus が結婚の申し込みをし、Titus が了承し、Lavinia が事実上了承と受け取れる発言をしていることである。Bassianus が異議申立てをするのは Saturninus が Titus 父娘の意思確認を済ませて退場しようとするときである：

Saturninus: Thanks, sweet Lavinia. Romans, let us go.

Ransomless here we set our prisoners free;

Proclaim our honours, lords, with trump and drum.

Bassianus: Lord Titus, by your leave, this maid is mine. (1. 1. 277-80)

Bassianus と Lavinia の婚約を Titus が承知していたか否かについては見解が分かれる。Sommers ら多数の批評家は Bassianus と婚約しているにも関わらず娘を Saturninus に与え、それをいさめる息子を殺すことによって Titus は過失を重ねていくが、Titus の悪行はすべて piety の乱用から生じると考える。<sup>28)</sup>それに対して Kahn は家父長制度下では娘の処女は財産であるのに Titus が財産管理を怠り娘の婚約に気づかないことが Titus の悲劇の原因だと断じている。<sup>29)</sup>Lavinia の婚約については叔父や兄弟も祝福しているのに父だけが承知していないのは不自然ではあるが、Bassianus が異議申し立てをしたときの Titus の驚き—“How sir/ Are you in earnest then, my lord?”(1.1.281)—や、息子を殺してまでも Lavinia を連れ戻そうとすることや、Bassianus の“highly moved to wrath/ To be controlled in that he *frankly* gave”(1. 1. 424-25; 強調筆者)という言葉は、Titus が Lavinia と Bassianus の婚約を承知していなかったことを強く示唆している。家父長制度下では娘の所有権は父に帰属する。だから求婚者が父の意向を伺い、娘が父の承諾に口を挟まないのは自然であるが、Titus が Lavinia と Bassianus の婚約を認めていないなら Saturninus との結婚を阻止するためには父が了承する前に Lavinia が厳罰覚悟で結婚できない理由を申し述べるしかないではないか。Tamora の不貞を非難するときの激越から判断すれば Lavinia は決して自己主張できない人形のような存在ではない。それなのに何故 Desdemona や Hermia や Juliet にできることが Lavinia にできないのか。なるほど相手は Bassianus との帝位争いを制して帝位についたばかりであり、求婚の辞退が Desdemona や Hermia や Juliet よりも難しいことは理解できる。しかし逆に言えば「全ローマが見守る場」で皇帝の求婚に承諾の意を伝えることは後戻りできなくなることを意味する。加えるに Juliet の場合のように自分の預かり知らぬ場所で父親が求婚者に承諾を与えてしまったの

と異なり、Lavinia の目の前で承諾を求めているのだからそれだけ辞退しやすいはずである。それなのに何故 Lavinia は沈黙を守っているのか。

Paris との結婚を強要された Juliet から危機脱出の方法を聞かれたときに乳母は Romeo と今度の求婚者の社会的地位などを比較すれば Paris と結婚するほうが断然得なのだし、バレる恐れはないから重婚してしまえと忠告する：

Romeo is banished, and all the world to nothing  
That he dares ne'er come back to challenge you;  
Or if he do, it needs must be by stealth.  
Then since the case so stands as now it doth,  
I think it best you married with the County.  
.....  
I think you are happy in this second match,  
For it excels your first. . . .<sup>30)</sup>

Lavinia が沈黙を保つのは乳母の忠告に似た考えが彼女の脳裏をよぎったからだとは考えられまいか。つまり Saturninus が帝位に就くことで兄弟間の争いに決着がついたばかりなのだから Bassianus はよもや正当な権利の主張はしないだろう。それならば Bassianus に忠誠を尽くして兄弟の争いを蒸し返し、Titus 及び Andronici 族の立場を悪くするよりも Saturninus と結婚するほうがマシだという考えが脳裏をよぎったのではないか。

#### IV

2幕3場で Tamora の息子達に強姦される直前に Lavinia は彼女にとって操を守ることは命よりも大切だと主張する。また5幕3場では“the girl should not survive her shame,/ And by her presence still renew his sorrows.”(5. 3. 40-41)だから Titus は Virginius の例に倣って Lavinia を殺す。ことほど左様に Titus の世界は貞節を重要視している。Lavinia は Saturninus の求婚に事実上同意と取れる言動をしてもすんでのところ Bassianus に救い出されるのだから結果として Bassianus に対して不貞は犯していないと言えるかもしれない。少なくとも拳式は回避できたし、Saturninus と Lavinia の間に何の性的関係も存在しないことは確かである。しかし Lavinia を取り戻した Bassianus に対して Saturninus が投げつける“Thou and thy faction shall repent this *rape*”(1. 1. 409; 強調筆者)という言葉は別にしても Bassianus が Lavinia を連れ去るのを阻止しようとするときの Titus のセリフ、“Lavinia is surprised”(1. 1. 288)と Lavinia に去られた Saturninus が Tamora と2人の息子及び Aaron を連れて登場したときに言うセリフの中で使われている言葉“that changing piece”(1. 1. 314)はともに性的ニュアンスを帯びた言葉である。更に言うならば Lavinia が Saturninus から奪い去られたことについて Titus と Saturninus は“dishonour”という語を繰り返し用いるが(1. 1. 300; 1. 1. 308; 1. 1. 390; 1. 1. 437; 1. 1. 440)この語は Lavinia を殺すときに Titus が使う言葉“Die, die, Lavinia, and thy *shame* with thee,/ And

with thy *shame* thy father's sorrow die”(5. 3. 45-46; 強調筆者)と関係のある言葉である。加えるに Lavinia が凌辱されたことを知った Titus は Progne を凌ぐ凄まじい復讐を計画するが、Lavinia を奪われた Saturninus も復讐を考える：“What, madam, be dishonoured openly,/ And basely put it up without *revenge*?”(1. 1. 437-38; 強調筆者)これら一連の言葉は肉体関係の有無に関わらず全ローマの見守る中で皇帝からの求婚に応じることは結婚式を挙げるのに近い意味を持っていることを示唆しているのではないか。

Titus は捕虜として連れてこられた Goths の女王がいきなり Rome の皇后にまで成り上がったことについて“Whether by device or no, the heavens can tell./ Is she not then beholden to the man/ That brought her for this high good turn so far?”(1. 1. 400-402)と言う。確かに Aaron は Lavinia の暴行凌辱事件や Bassianus 殺しやその罪を Titus の息子に帰することや息子の命と引き換えと称して Titus から手を騙し取った挙句に死んだ息子の首を返すなどこの劇の一連の悪事の黒幕である。しかし Aaron は無から悪を作り出すのではなく、与えられたチャンスを最大限に利用して悪事をなす「日和見主義者」<sup>31)</sup>である。先に述べた一連の悪事に成功するのも Titus が森で狩をすることを提案し、その森の中には自然が用意した悪事のための場所と思えるところがあるからである。なるほど Lavinia に去られる前に捕虜として連れられてきた Tamora を見たときから Saturninus は彼女の美しさに魅了されている。しかし Saturninus が Tamora に求婚する前提として“*And therefore*”(1. 1. 320)と付言しているように、もし Lavinia が Saturninus 后になれていたなら Tamora は Saturninus の寵愛を受けるにしても彼女と Aaron が Andronici 族に行使しうる力はずっと限定的なものになっていただろう。この意味において Titus が娘の管理を怠っていたのが悲劇の原因であるとする Kahn の指摘は卓見である。しかし Lavinia と Bassianus の婚約は Lavinia の兄弟や Titus の弟である Marcus にも祝福されているものであること、また Bassianus は Saturninus の弟であり、帝王争いに敗れはしたものの、家柄や能力の点で兄と何ら遜色がないこと、更には Titus は Goths 族との長の戦いから戻ったばかりであり娘の婚約について知らされていなくても無理からぬところがあることからするならば、問題は Lavinia と Bassianus の婚約そのものよりも Saturninus から求婚されたときに Lavinia がその事実を黙秘したことにあると言えるのではないか。Bassianus との婚約を打ち明けたところで Saturninus が Tamora と結婚するのを避けることはできなかったであろう。しかし Saturninus の怒りの核心は“*be dishonoured openly*”(1. 1. 437)されたことにある。もし求婚されたときにはっきりと辞退していれば Saturninus を不快にはしただろうがそれほどの不興を買うことは避けられたのではないか。なるほど Andronici 族を悲劇に突き落とすのは Tamora と Aaron だが、公然と恥を搔かされることによって Tamora と Saturninus の思惑が一致することにも注意しなければならない。自分を帝位につけてくれた Titus に対する Saturninus の感謝の念が自分の求婚を辞退された不快感を上回る状態を維持できていれば Tamora の復讐の刃は鈍ったのではあるまいか。

## 結び

*Titus Andronicus* はいわれのない凄まじい流血故になかなか Shakespeare の作品として

認められてこなかった。そしてそのいわれなき流血の中心に存在するのが無垢の Lavinia が凌辱され、舌と手首を切り落とされることである。しかし Lavinia の苦悶は決して単にテニスボールのように彼女が運命に弄ばされた結果とは言えない。既に婚約しているのに皇帝から求婚されたとか、Titus への復讐心を燃やしている Tamora が皇后になった等 Lavinia を取り巻く運命の大きさを過小評価することはできないが、Tamora の不貞を激しく非難することで彼女の復讐心に磨きをかけたのは Lavinia だし、それ以上に Saturninus に求婚されたときに既に Bassianus と婚約していることを黙秘してあたかも求婚を受け入れたかのような発言をしたのに Bassianus が彼女を取り戻そうとすると Saturninus を捨てることによって公然と皇帝を侮辱して彼の怒りを招くのも彼女だからである。Lavinia は決して単なる“innocent victim”ではない。彼女の苦悶の原因の一端は彼女自身に存在するのである。

注

- 1) Eugene M. Waith, “The metamorphosis of violence in *Titus Andronicus*,” *Shakespeare Survey* 10 (1957): 39.
- 2) J. L. Simmons, “Shakespearean Rhetoric and Realism,” *The Georgia Review* 24 (1970): 460.
- 3) H. B. Charlton, *Shakespearian Tragedy* (Cambridge: Cambridge UP, 1961) 21-24.
- 4) Wolfgang Clemen, *The Development of Shakespeare’s Imagery*, 2<sup>nd</sup> ed. (1951; London: Methuen, 1977) 21-29.
- 5) C. L. Barber and Richard P. Wheeler, *The Whole Journey: Shakespeare’s Power of Development* (Berkeley: U of California P, 1986) 127.
- 6) Jonathan Bate, introduction, *Titus Andronicus*, by William Shakespeare (London: Routledge, 1995) 80.
- 7) Bate, 82-83.
- 8) Alan Hughes, introduction, *Titus Andronicus*, by William Shakespeare (Cambridge: Cambridge UP, 1994) 12.
- 9) Eugene M. Waith, introduction, *Titus Andronicus*, by William Shakespeare (1984; Oxford: Oxford UP, 1998) 20.
- 10) Reuben A. Brower, *Hero and Saint: Shakespeare and the Graeco-Roman Heroic Tradition* (Oxford: Clarendon P, 1971) 173.
- 11) Ruth Nevo, “Tragic Form in *Titus Andronicus*,” *Further Studies in English Language and Literature*, ed. A. A. Mendilow (Jerusalem: Magnes P, 1973) 1.
- 12) Richard Marienstras, *New Perspectives on the Shakespearean World*, trans. Janet Lloyd (Cambridge: Cambridge UP, 1985) 47.
- 13) Grace Starry West, “Going by the Book: Classical Allusions in Shakespeare’s *Titus Andronicus*,” *Studies in Philology* 79 (1982): 77.
- 14) D. J. Palmer, “The Unspeakable in Pursuit of the Uneatable,” *Critical Quarterly* 14

(1972): 339.

<sup>15)</sup>T. S. Eliot, *Selected Essays* (1932; London: Faber and Faber, 1951) 82.

<sup>16)</sup>Hughes, 32.

<sup>17)</sup>R. S. White, *Innocent Victims: Poetic Injustice in Shakespearean Tragedy*, 2<sup>nd</sup> ed. (London: Athlone, 1986) 27.

<sup>18)</sup>White, 27.

<sup>19)</sup>Nevo, 9.

<sup>20)</sup>A. C. Hamilton, *The Early Shakespeare* (San Marino: Huntington Library, 1967) 76.

<sup>21)</sup>R. F. Hill, “The Composition of *Titus Andronicus*,” *Shakespeare Survey* 10 (1957): 62.

<sup>22)</sup>William Shakespeare, *Titus Andronicus*, ed. Jonathan Bate, 1. 1. 242-46. 以後この本からの引用はすべて本文中に幕, 場, 行を記すにとどめる.

<sup>23)</sup>William Shakespeare, *A Midsummer Night's Dream*, ed. R. A. Foakes (1984; Cambridge: Cambridge UP, 1988) 1. 1. 65.

<sup>24)</sup>William Shakespeare, *Othello*, ed. Norman Sanders (1984; Cambridge: Cambridge UP, 1988) 1. 3. 178.

<sup>25)</sup>*Othello*, 1. 3. 184-87.

<sup>26)</sup>*A Midsummer Night's Dream*, 1. 1. 79-82.

<sup>27)</sup>William Shakespeare, *Romeo and Juliet*, ed. G. Blakemore Evans (1984; Cambridge: Cambridge UP, 1988) 3. 5. 147-48.

<sup>28)</sup>Alan Sommers, “‘Wilderness of Tigers’: Structure and Symbolism in *Titus Andronicus*,” *Essays in Criticism* 10 (1960): 281.

<sup>29)</sup>Coppelia Kahn, *Roman Shakespeare: Warriors, Wounds and Women* (London: Routledge, 1997) 51.

<sup>30)</sup>*Romeo and Juliet*, 3. 5. 213-23.

<sup>31)</sup>Eldred Jones, *Othello's Countryman: The African in English Renaissance Drama* (London: Oxford UP, 1965) 55.